

# 児童の英語への自信を育む小学校外国語教育の実践

—ステーション・ローテーションの効果検証を中心として—

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 萱沼美結

## 1. 問題の所在

昨年度、筆者は学びと実践の場をアメリカへ移し、言語教育について研鑽を積んできた。日本語アシスタント教師として現地の公立小学校でインターシップを行ったのである。英語を母語とする現地の生徒に外国語として日本語を教える中で、筆者は言語教育に必要な要素を今一度考えることができた。それは学習意欲である。一年間のインターンで筆者が最も悩んだことは、生徒の中に学びたいという学習意欲を生み出すことであった。生徒に意図的にインプットを与えても、日本語への学習意欲が持てない生徒はその言葉を気に留めたり、意味を考えたりすることがなかったからである。この経験から、外国語教育において学習意欲を育てることが重要であるとさらに考えるようになった。

では学校現場における現状はどうだろうか。文部科学省(2017)は「英語が好き」と答えた児童生徒が小5・6生 70.9%、中1生 61.6%、中2生 50.3%という調査結果を示し、「長期的には外国語を学ぶ意欲が下がる」(p.152)と指摘している。なぜなら、発達に伴い他者と自分を比較するようになった児童生徒が、自分は外国語を学ぶのに向いているのかを判断できるようになるからである(文部科学省, 2017)。この主張から筆者は、児童生徒が他者との比較の中で自信を失くし、学習意欲が下がっているのではないかと考えた。そして児童の英語への学習意欲を高めるために、英語への自信の育成を重要視するようになった。

そこで本研究では、稲垣(2020)より「自信」を「『自分には能力がある』という思い(American Psychological Association, 2020)」

(p.1)と定義し、児童の英語への自信を育む小学校外国語教育の研究を行う。そのための学習方法として本研究では、ステーション・ローテーションに着目した。

## 2. ステーション・ローテーションとは

### (1)定義

ステーション・ローテーション(以下、SR)は生徒が異なる学習形態をローテーションで移動して回る学習方法のことで、その学習形態の一つは少なくともオンライン学習と定義されている(Truitt, 2016)。一般的な学習形態の組み合わせは、オンライン学習を行う An online station, 教師主導で学習を進める A teacher-led station, 児童主体でグループ活動を行う An offline station の三つである(図1)。教師は A teacher-led station に入りながら10~15分ごと全体を回していく(Edpuzzle, 2021; Truitt, 2016)。この学習形態はあくまでも一般的なものであり、教師は児童の実態や教科に合わせてその学習形態を変えることが可能である(Truitt, 2016)。

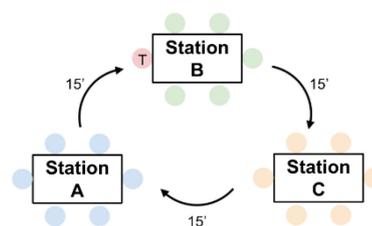


図1 SRのイメージ図(Edpuzzle, 2021)

### (2)効果

Truitt(2016)は様々な学習方法を取ることや少人数指導により丁寧な指導を行うことで、児童生徒に対して柔軟な対応が可能であると

している。またオンラインによる個別学習の場があることで児童生徒がより主体的に授業に参加できること、ローテーションにより学習を繰り返すことで内容の定着を図ることも効果として挙げている。さらに筆者がSRを知るきっかけになったインターン先の小学校の先生へのインタビューからも、SRの効果を調査した。「ステーション」と呼び親しまれていたその活動は2年生の日本語の授業で実践されていた。約20名のクラスを3~4グループに分け、ステーションごと違った先生・方法で学習を進めていた。中にはiPadを用いて児童自身で学習を進めるステーションもあった。SRとして実践されていたわけではないがSRの定義を全ておさえていることから、本研究ではSRとしてその効果を実践者である先生に聞いた。インタビューでは、褒めることで生徒の自信が増すこと、生徒それぞれの得意・不得意にアプローチできること、全員の発話が聞こえること、そして生徒が主体性を持って楽しんで取り組んでいるなどの効果が明らかになった。以上の調査により、SRは個に応じた指導が可能になることが明らかになった。

### 3. SRの小学校外国語教育への導入の意義

本研究で問題意識として掲げている「自信」は、外国語を実際に使ったり学んだりするなかでの成功体験によって高められる(稲垣, 2020)。成功体験を生み出す手立ての具体例としては、教師や友達によるScaffolding(足場かけ)やほめ言葉(竹内, 2011)、きめ細やかなフィードバック、難易度に合わせた指導、能力別クラス(稲垣, 2020)などが挙げられている。これらは先述したSRの効果である個に応じた指導において実践可能な手立てである。また各ステーションを回る少人数グループを能力別に編成することで、難易度に合わせた指導も可能となる。さらに先行研究では挙げられていないが、SRのオンラインによる個別学習も、成功体験を生み出す手立てとして筆者は考えている。例えば体育の授業において、

筆者は一人でアドバイスを理解したり練習したりする時間が必要だと感じる。英語も体育と同じパフォーマンス教科であるからこそ、個で取り組む時間が必要な児童もいるのではないだろうか。このSRの個に応じた指導は、昨今、日本の教育現場において重要視されている考え方である。日本の外国語教育における自信に効果があること、またニーズに合っていることから、日本の小学校外国語教育において実践する意義はあると考えている。

### 4. 研究の目的とリサーチクエスション

以上の背景から、日本の小学校外国語におけるSRを考案・実践し、その効果検証を行うために以下のリサーチクエスション(以下、RQ)を設定した。

RQ1)ステーション・ローテーション(Station Rotation)を用いた英語学習によって、児童は英語に対して自信を生じるか。

RQ2)ステーション・ローテーション(Station Rotation)を用いた英語学習によって、児童の表現力は伸びるか。

RQ2について、児童に質問紙調査で「できたら自信を感じる場面」の回答をお願いしたところ、最も回答の多かった場面が「英語でたくさん話せた時」であった。したがってSRで表現力が伸びるのかについても検証していく。

### 5. 外国語科におけるSRの考案と実践

#### (1)対象

山梨県A小学校 第6学年児童20名(一学級22名のうち、同学級内で授業を受けている20名を対象とした。)

#### (2)日本の外国語科におけるSRの考案

本研究では、日本の教育現場の実態と外国語科の特質を踏まえてSRを考案した。筆者が考案したSRでは、個別学習ステーション・ALTステーション・担任(以下、HRT)ステー

ションの三つを組み合わせた学習形態を設定した。

まず個別学習ステーションは、先述した「学習形態の一つは少なくともオンライン学習」というSRの定義から設定をした。デジタル教科書を使って個別学習を行うことで、自分の分からないことを解決したり練習したりすることができる。このように自分のペースでの学習が成功体験につながることを期待した。

続いてALTステーションとHRTステーションは先述した「成功体験は外国語を使ったり学んだりする過程の中で生まれる」という先行研究より設定し、外国語科で重要視されている言語活動の時間を十分に確保した。一般的な学習形態に従うと児童主体でグループ活動を行うAn offline stationをここで設定すべきであるが、本研究ではALTステーションを設定した。外国語の授業において児童がALTと話すことは実践的な成功体験に繋がると考える。したがって少人数で学習するSRにALTステーションを組み込むことで、児童一人一人がALTと関わることができるようにした。一方A teacher-led stationにあたるHRTステーションでは担任の先生による言語活動を含めたいつもの授業を行い、大事な点やフィードバックを日本語でおさえられるようにした。ここではきめ細やかなフィードバックや、教師や友達からの足場かけが成功体験に繋がると期待した。

### (3)実践計画

#### ①単元の概要

本研究では、Here we goの「Unit7 My Best Memory」の単元の中でSRを実践した。7時間目にグループ内でALTに小学校一番の思い出を伝える単元末の活動を設定し、それに向けて各時間を以下のように設定した。SRを用いたのは第5～6時の二時間である。まず1～4時間目は通常通りの授業を担当の先生にお願いした。修学旅行や林間学校などを話題に言語活動を行い、必要な表現を学んだ。続いて5～6時間目では、実際にALTに伝えたい思い

出を考え、そのスピーチをパワーアップさせるための時間とした。

#### 【第1～4時】

思い出を伝えるための表現を学ぶ

#### 【第5～6時】

ALTに分かりやすく伝えるために内容や説明を追加する

#### 【第7時】

ALTに小学校一番の思い出を伝える

### ②SRを用いた一時間の授業の概要

5～6時間目のSRを用いた一時間の授業は、10分間の一斉指導、SR30分間、振り返りシートへの記入という流れで進めた。一斉指導では「ALTは日本出身ではないから、思い出を伝える際、何をしたかどのような行事かなどの詳しい内容や説明が必要だね」という導入を行い、SRで取り組む課題を明確にした。さらにALTや担任の先生と話したり、個別学習で表現を学習したりしてスピーチをより分かりやすいものにしようというSRの役割についても触れた。また教室は図のように準備し、各ステーションを10分で回すことで一回の授業で全てのステーションを回ることができるようにした(図2)。

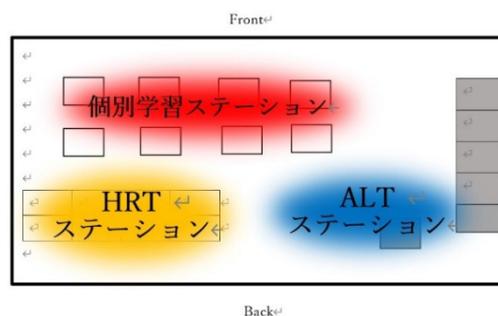


図2 実践中の教室図

また本研究では能力別グループを編成し、そのグループごとステーションを回るようにした。先述した先行研究調査で「児童は発達に伴い自分と他者を比較するようになるため意欲がなくなる」と明らかになった。そのため能力別グループという形を取った。ま

た難易度に合わせた指導によって児童が成功体験を得られることを期待した。グループ編成については教師の意見だけではなく児童自身の希望も質問紙で調査した。具体的なグループ編成は、英語の力をもっと伸ばしたいというチャレンジグループ(Group1)、英語は得意でも苦手でもないから今の自分の力を確実にしたいスタンダードグループ(Group2)、じっくりゆっくり学習したいじっくりグループ(Group3)の三つを設定し、どの学習進度で学習したいかを聞いた。編成された各グループは以下の順番で各ステーションを回った。

Group1(6人) 個別学習→ALT→HRT  
 Group2(8人) ALT→HRT→個別学習  
 Group3(6人) HRT→個別学習→ALT  
 ※「ステーション」は省略して記載

Group1 から順に英語力が高いグループとなっている。Group3は一回目の取り組みの様子から一・二回目同様の順番で実施したが、Group1, 2は児童の要望を踏まえ一・二回目の順番を入れ替えた。

## 6. 実践結果と分析

### (1)各ステーションの実践結果

SRで児童がどのように取り組んでいたのか、その結果をステーションごとにまとめていく。

#### ①個別学習ステーション

ALTにとって分かりやすいスピーチにするための必要な表現の学習、他のステーションで分からなかったことの解決を目的としてこのステーションを児童に提示した。個別学習ステーションをより効率的に取り組めるように、解決したい課題、取り組んだデジタル教科書のコンテンツ、振り返りや次のステーションへの課題をまとめることができるシートを用意した(図3)。このシートは、児童が日頃デジタル教科書を使用した家庭学習に取り組む際に使用しているもので、作成した担任の先生に許可を頂きお借りした。課題の設定では「感想や気持ちを入れる」や「いつ行った

か言えるようにする」など別のステーションで見つけた課題を設定していた。その課題解決のために児童は「Let's listen and read」「Let's watch」などのコンテンツに取り組んでいた。特に多くの児童が取り組んでいたのは「Let's chants」である。ここでは Chantsの音楽に合わせて表現を練習していた。振り返りでは「感想を入れたら内容が詳しくなってALTがよくわかると思う」や「自然教室のカレーがとてもおいしかったと言いたい」など次のステーションに向けた課題が見られた。

目的課題	単元	コンテンツ	個人学習を振り返って、次のステーションに向けての課題	先生から	課題の振り返り
ALTの先生に詳しく内容を伝えるようにしよう。	Unit 7	Step1 Let's chant	どこに行ったらかとかそこで何をしたらか、その時の感想はど入れたら内容が詳しくALTの先生がよく分かると思う。		おひるなかくできた

図3 児童が使用したシート(藤木真里佳先生作成)

#### ②ALTステーション

このステーションでは、ALTに思い出を伝えることを通してどのような内容や説明の追加が必要かを知ろうという目的を児童に伝えた。ステーション内で見られた会話は次の通りである(教師はT、児童はSで表記)。以下の修学旅行のやり取りでは、ハンバーグが伝わらない児童を他の児童が「hamburg steak」と言って助ける、足場かけの姿が見られた。

S1: I ate hamburg.  
 T: What is that?  
 S2: Hamburg steak.  
 T: Oh, hamburg steak!

運動会に関する以下のやりとりでは、ハリケーンという種目が何か分からないALTに対し、児童がそれぞれ知っている単語を絞り出し伝えようとする姿が見られた。最終的にハリケーンとはどのような種目かを伝えることができ、児童は通じたという経験を得ていた。

T: What is the hurricane race?  
 S1: Cone.  
 S2: Pair.  
 S3: Pair run.  
 S4: Stick.

林間学校に関するやりとりでは、どこに行ったかをALTに伝える際、ALTの反応を見て「清里」ではなく「北杜市」という単語を選択する児童の姿から、相手意識が見られたことが分かる。

T: Where did you go?  
 S1: Kiyosato.  
 S2: Hokuto-city.  
 →(反応を見て)清里は知らない。じゃあ Hokuto-city と言おう。

### ③HRT ステーション

児童には他のステーションで学んだことを実践したり、疑問を解決したりする場として提示した。担任の先生にいつもの授業に近い形で進めてもらったこのステーションでは、次のやり取りが見られた。以下の修学旅行のやり取りではALTがどのようなことを聞きたいかをみんなで考え、先生から使えるような表現のフィードバックを得ていた。

T: ALT はどんなことを聞きたいかな。  
 S: When?  
 T: When was school trip?  
 S: July.  
 T: School trip was in July.  
 他の行事でも使えるね。

修学旅行に関するもう一つのやり取りの場面では、先生の問いかけに対して困った児童に他の児童がいくつか単語を言うことで、友達から足場かけを得ている姿が見られた。

T: What did you see?  
 S1: . . .  
 T: 友達が困っているときはどうしたらよい? 例を言えばよかったね。  
 S2: Dolphin. S3: Jelly fish.  
 S1: I saw dolphin.

その他に運動会に関するやり取りでは、ひとつ前のALTステーションで大玉転がしの英語を学習した児童が、早速学んだ表現をアウト

プットする姿も見ることができた。

T: What sports game do you like?  
 S: I like big ball passing game.

### (2)質問紙調査の分析方法

実践結果の分析方法として、本研究は質問紙調査という形をとった(表1)。また質問紙調査では見取ることができない自信の変容やSRの効果については、毎回の授業終わりに記入する振り返りシートや簡単な個別インタビューの結果も参考にした。

表1 質問紙調査の項目一覧(n=20)

問1 私は英語ができると感じる(6件法)
問2~4 以下の場面で、英語で自分の考えを伝えることができる。(6件法)
問2 友達とのペアトーク
問3 班やクラス全体に向けて
問4 担任やALTに向けて
問5 自分のスピーチに内容や説明を追加することができましたか。(2件法)
問6 SRは英語の学習に役立つと思いますか。(3件法)
問6-1 その理由を教えてください。(記述)
問7 SRの感想(記述)

この質問紙調査は大きく三つに分けることができる。まず問1~4ではRQ1の自信の変容を見取った。0~5の尺度を用いた6件法でどのくらい自信を感じるかを実践前後で聞いた(図4)。これらの設問において実践後に平均値が増加した場合はRQ1の「SRを用いた英語学習によって、児童は英語に対して自信を生じるか」で自信は生じるとする。

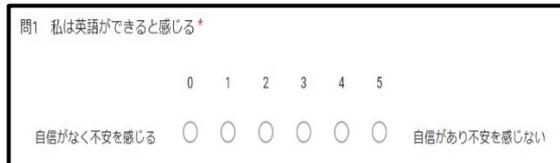


図4 問1~4の回答フォーム  
 続いて問5ではRQ2の表現力を見取った。実

践後に2件法でスピーチに内容や説明を追加することができたかを聞いた。この設問に対して「はい」の回答が多かった場合は、RQ2の「SRを用いた英語学習によって、児童の表現力は伸びるか」で表現力は伸びるとする。その他の問6～7ではSRの効果を見取った。

### (3)質問紙調査の結果と分析

質問紙調査の結果を①自信の変容、②表現力、③SRの効果の順に見ていく。

#### ①RQ1 自信の変容

まず本研究における自信の定義に従って設定した「問1 私は英語ができると感じる」の設問では、平均値が2.75から3.15と増加し、t検定を行ったところ有意差ありであった(表2)。このことから問1において児童の英語に対する自信が生じたという結果になった。さらに細かく分析をするとポジティブな変容が見られた児童は7名、ネガティブな変容が見られた児童は1名であった。7名の児童の自信が生じた理由を個別インタビューやSRの感想を用いて分析を行った。以下で3名の児童のコメントを取り上げる。

- A) HRTステーションで分からない英語がなくなった。(0→2に変容)
- B) 個別学習で自分が分からなかった単語を学習できたから。(2→4に変容)
- C) ALTとたくさん話すことができ、言えるようになったと感じた。(4→5に変容)

できたことに関する感想が各ステーションで見られたことから、児童はSRで成功体験を得たという結果になった。

続いて問2～4では角谷・前田(2019)の質問紙調査を参考に場面を提示し、その場面において自分の考えを英語で伝えることができるかを聞いた。結果は表2のようになり、全項目において自信は生じなかった。またt検定は有意差なしとなった。この結果をさらに分析するため、問3でネガティブな変容が見られた児童5名を抽出した。問3に注目して分析

を行ったのは、変容が見られた問2の場面は本実践のSRでは設けられなかったからである。問3でネガティブな変容が見られた児童5名の共通点は、問1においてネガティブな変容が見られなかったことであった。つまり問1と3で逆の変容になったということである。その理由として考えられる点が二つある。まず一つ目は、事前調査の問3の回答で、4名が4以上を回答していたことである。5→4と変容した児童Dは「だんだん分からない単語が増えた」と述べており、自分の分からない部分に気づいたとのことだった。二つ目は問4において4名がネガティブな変容を見せたことである。4から3に変容した児童Eは「正しく言えたけどところどころつまったりかんたりにしてしまった」と述べており、ゴールの活動に対して冷静な自己評価を行っていた。この分析結果から、自分の能力の気づきや冷静な自己評価と、SRは児童が個を見つめる機会になっていたことが分かった。

表2 質問紙調査 問1～4の平均値

	前	後
問1 私は英語ができると感じる。	2.75	3.15
問2 友達とのペアトーク	2.95	2.9
問3 班やクラス全体に	2.4	2.35
問4 担任の先生やALTに	2.7	2.7

#### ②RQ2 表現力

表現力を見取った問5は「できた」18名、「できなかった」2名であり、9割の児童がSRで表現を増やすことができたという結果になった。SRの感想で「みんなで会話を広げることができるから楽しかった」と述べている児童がいるように、グループ内で会話を進めたことで児童はより多くのインプットを得ている印象であった。

#### ③SRの効果

SRの効果については、問6で19名が「役立つ」、1名が「どちらとも言えない」と回答

し、「役立たない」と回答した児童は0名であった。このことから多くの児童にとってSRは有効であったという結果になった。「役立つ」と回答した理由には、まず自分の能力を知る機会になったという以下の記述が見られた。

- F) 自分が今どれだけ話せるか分かる。  
G) 自分の足りないところを知れる。

特に多かった理由はSRの特徴である別の学習形態の組み合わせに関連したものであり、以下のような記述が「役立つ」と回答した児童19名中11名から見られた(「ステーション」は省略して記載)。

- H) 個別学習とHRTで習ったものをALTで成果を出せるから良いと思った。  
I) ALTで話せなかったところを、HRTや個別学習で確認することができた。  
J) 個別学習で復習できるし、人と会話するステーションで定着させることができるから。

一方、「どちらとも言えない」と回答した児童Kは「自分はどんどん会話を広げたくかったから、個別学習よりかはALTやHRTと話す方が役に立った」と述べていた。問6-1の記述全体を分析すると、英語を得意とするGroup1は個別学習に関する記述が他のグループと比べて少なかった。このことから、どの能力の児童にも合う個別学習の方式や内容について検討する必要性が挙げられる。

最後に児童のSRの感想である。感想は三つに分けることができた。まず一つ目は自信に関する感想である。「これまではこの英語何だったっけと思うところがあったけれど、SRで分からない英語が少なくなりました。これが英語学習への自信に繋がりました。」と児童はSRの中で自信が生まれたことを自覚していた。二つ目は表現力に関する感想である。「SRで内容をたくさん増やすことができた」という感想が見られた。三つ目は学習形態に関する感想である。問6-1の役立つと思う理由に関する記述と同様にSRの特徴である別の学習

形態の組み合わせに関する感想が見られた。

## 7. 考察

以上の分析を踏まえ、RQの結果は次のようになった。まずRQ1「ステーション・ローテーション(Station Rotation)を用いた英語学習によって、児童は英語に対して自信を生じるか」は、児童の英語への自信は部分的に生じた。次にRQ2「ステーション・ローテーション(Station Rotation)を用いた英語学習によって、児童の表現力は伸びるか」は児童の表現力は伸びた。RQにおける結果以外にも本研究を通してSRの成果と課題が明らかになった。

まず本研究におけるSRの成果として、図5のようなメカニズムの中で児童の自信・表現力が育成されることが明らかになった。

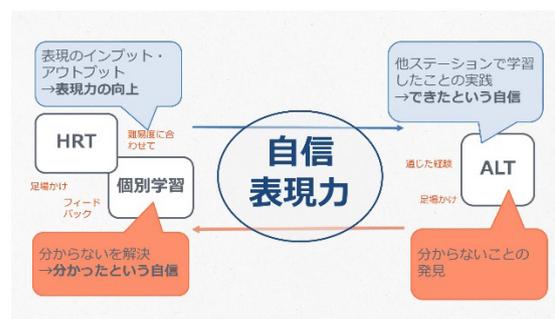


図5 SRのメカニズム

児童の記述から明らかになったメカニズムは二つである。まず青い矢印のようにHRT・個別学習ステーションで表現を学習しALTステーションでその成果を発揮することで、できたという自信を得た児童がいた。それとは逆に、赤い矢印のようにALTステーションで分からないことを発見しそれをHRT・個別学習ステーションで解決することで、分かったという自信を得た児童がいた。実践前はSRに含まれる成功体験の要素が自信等の育成に効果があると考えていた。しかしそれだけではなく、各ステーションが作用し合って自信・表現力を育成していることが明らかになった。また筆者から見て対象学級はメタ認知が発達していたということもあるが、SRは児童が自分の能力を知る機会になる。できることだけ

ではなく、できないことも知ることができる。さらに児童自身がこの活用方法を見出したように、SRは自分に合った学習方法を考える機会になることも、感想から明らかになった。

続いて本研究におけるSRの課題である。成果で明らかになった「SRは自分の能力を知る機会になる」という点より、継続的な実践が挙げられる。SRを通して発見したできないことが、自信になるまで継続的に行う必要がある。またSRは馴染みのない学習方法であることから、慣れるまで時間を要する児童もいた。児童自身で活用方法を見出すことができるまで継続的に実践していくことが必要である。さらに、質問紙調査の問6で挙げられた個別学習の工夫も課題の一つである。児童がスムーズに個別学習に取り組めるように授業導入で課題を明確にすることはもちろんのこと、どの能力やニーズを持った児童でも有効に取り組むことができる個別学習についての検討が必要である。

## 8. 現場への示唆

SRは児童生徒の実態・教科に応じて工夫が可能な学習方法である。本研究ではSRを外国語の授業で用いたが、アメリカの実践や先行研究を見ると算数で用いられる場合が多い。したがって、本研究で学習形態をアレンジしたように、他教科への汎用性も期待できる。また学習形態の組み合わせさえ考えれば、外国語科に関してはALTとの簡単な打ち合わせのみで事前準備は要さなかった。この時間の経済性も魅力の一つと言える。そして成果において複数のメカニズムが明らかになったように、SR最大の魅力は個のニーズに対応できる点である。だからこそ、ステーションを回る順番やグループ編成は自由度を保つことが大切である。回る順番に関しては、固定せずに色々な順番を試みることで児童自身が自分に合った順番に気づくことができる。但し、即時の課題解決・成功体験の獲得のために一回の授業内で全ステーションを回ることを推奨したい。グループ編成に関しては、

どのグループ編成にも良い点・課題点がある。本研究では筆者自身が始めは肯定的でなかった能力別という形をとった。下位グループにおいては会話を広げるための指導の工夫が必要であったが、いつもは発言回数が少ない児童の積極性が見られる等の良い点もあった。したがって色々なグループ編成を試すこともSR活用の大切な要素であると考えられる。

## 9. 引用文献

- 稲垣善律(2020)「「できる」を育て「やろう」を伸ばす 一生徒の自信と自己効力感を高め学習意欲を引き出すには一」『数研出版チャートネットワーク』第93号, p1-4
- 角谷尚希・前田康二(2019)「小学校英語におけるブレンディッドラーニングを取り入れたコミュニケーション意欲を高める取組の考察ーコミュニケーション能力の「社会言語能力」「方略的能力」を意識させる実践を通してー」『奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」』第11巻, p21-33
- 竹内理(2011)「英語教師のための基礎講座：英語学習の Doing, Feeling, Thinking(2)」『Teaching English Now』第21巻 p12-13
- 文部科学省(2017)「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」文部科学省 HP [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm)
- Apricot Ann Truitt(2016)「A Case Study of the Station Rotation Blended Learning Model in a Third Grade Classroom」『University of Northern Colorado scholarship & Creative Works @ Digital UNC』 <https://digscholarship.unco.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1370&context=disseminations>
- Edpuzzle(2021)「A Complete Guide to the Station Rotation Model」Edpuzzle HP <https://blog.edpuzzle.com/teaching-today/complete-guide-station-rotation-model/>